

子供は悲しみを知らず

小川未明

青空文庫

ひろにわ
広い庭には、かきが赤くみのつていました。かきねの破れを直
して、主人は、いま縁側へ腰を下ろし、つかれを休めていた
のです。彼はこのあたりの地主でした。

うらもん
裏門から、寺のおしようさんが、にこにこしながら、入つて
くるのを見ると、ちよつと迷惑そうな顔色をしたが、すぐ笑
いにまぎらして、丁寧に迎えました。

「あまりごぶさたをしたので、前を通りかかったものだから。」
と、おしようさんは、いいました。

「どうぞ、すこしお上がりください。」

地主は、おしようさんを、茶の間へ通しました。

「おお、ここのにわとりは、ねこを追いかけるな。」と、土間のほうを見て、おしようさんは、さもおどろいたように、大きな声でいいました。

「このあいだ、卵を産んだので、魚の骨をやりましたら、ねこの分まで、自分のものと思ひ、しようのないやつです。」

「ほ、ほう、なるほどしつけは、怖ろしいもんだな。教育のしかたで、いい子も、わるくなるから。」と、あとのほうを、おしようさんは、ひとりごとのようにいって、立ち上がりました。

そして、仏壇の前へすわり、静かにかねをたたき、お念仏を唱えたのです。そこには、軍服姿をした若者の写真が飾られ、お供え物が上がっていました。

「まだお便りがありませんか。もう帰るものは、たいてい帰ったようにききますが。」

おしよさんは、もとの座へもどりました。

「うちのせがれは、死んだものと、あきらめています。」と、地主は、こう答えて、さすがにさびしそうでありました。

「いつ亡くなられたものかの。」

おしよさんは、声を低く落としました。

「なんでも、南へいった舟は、およそ途中でやられたという話で」

「いや、こんどの戦争では、おきの毒な方が、どれほどいるかしれません。なんにしても、戦争ばかりは、地獄にまざる、こ

「よの世の地獄ですぞ。」と、おしようさんは、ため息をもらして、
「めいもく瞑目しました。このとき地主のついでくれた茶をすすつて、ま
たおしようさんは、じつと考かんがえていました。庭の木立にわで、あぶら
ぜみの鳴く声ながします。」

先刻さつきから、おしようさんが、なんで立たち寄よつたろうかと思おもつた
のが、ほぼ察さつせられると、地主は、先手せんてを打うつつもりで、
「なにしろ頼たのみとするせがれでしたので、量りようけん見けんがせまいよう
ですが、当分とうぶん他人たにんさまのためにどうこうする気持きもちちも起おこりま
せん。」といいました。

「ごもつとものことです。ご存ぞんじのごとく、資力しりよくのない私わたしども
に、人ひとを助たすける資格しかくはありませんが、ほかでない、両りようしん親しんをな

くした、子供の身を考かんえますと、だれも世話せわをするものがなければ、自分じぶんがしなくてはという氣きでやったものの、皆みなの力ちからを借かりねばできぬ事業じぎょうです。」と、おしようさんはいいました。

「おおぜいの子供こどもの世話せわでは、おたいていありますまい。」

「いまのところ、まだ五、六人にんですが、なにしろこんな時勢じせいで、それさえ荷にが重おもすぎ、ときどき途方とほうにくれますよ。しかし、またいじらしい子供こどもの姿すがたを見ると、これを見捨みすてられるものかとむち打うたれるのです。」

この話はなしをきくうち、地主じぬしの目めに、一つの光景こうけいが浮うかびました。過日かじつこの孤兒園こじえんの孤兒こじたちが、連つれ立だって、書簡しょかんせんや、鉛えんぴ筆つや、はみがき粉こなどをかんへ入いれて、売うりにきたとき、自分じぶん

は、つれなく、「みんなあるから、いらぬ。」と、断つたのだ
 った。そのとき、子供らは恨めしうに、こちらを見たが、い
 れも顔色は青く、手足がやせて、草履を引きずって歩くのも物
 憂のうそうなようすであつた。

おしようさんは、前の茶わんをとり上げて、残つた茶をすすり
 ながら、

「子供には罪がありません。みんな大人の犯した悪の酬いです。

どうか、世間にそのことがわかつてもらいたいのです。さすがに、
 子供どうしの間では同情があつて、行商に出ると、鉛筆
 や、紙などを学校の生徒が買ってくれます。ありがたいこ
 とです。」と、こう、意味ありげにいつて、おしようさんは、扇

子でふところへ風かぜを入れていました。

この家の軒下いえのきしたには、薪たきぎが、山やまのごとく積つんでありました。また土間どまには、つけ物ものおけや、みそだるが、並ならべて置いてあり、中なかすみの方ほうには、まだどろのついたままの芋いもや、にんじんが、ころがつていました。さらに、奥おくの間まへ目めを向むけると、百し姓じやう家やにしては、ぜいたくすぎる派手はでな着物きものが、同おなじように高価こうかな帯おびといつしよに衣い袴こうへかかつていました。

外そとから見みて、何なんびと人ひとか、ここここに悲かなしみがあると思おもうだろうか。むろんここには近所きんじよまで迫せまった飢き餓がもなければ貧困ひんこんもなかつたのでした。

「ふとる盛さかりの子こに、腹はらいっぱい食たべさせられないのは、なによ

りもつらいのです。このあいだ、町まちからきた子が、白しろい飯めしをどうしてもたべません。きいてみると、こんな光ひかるご飯はんを、見みたことがないというのです。」と、話はなしました。

「光ひかるからというんですね。」

「なんでも、その子こは、母ははおや親ははおやと方ほう々ぼうを転てん々てんとしたというから、これまでの生せい活かつが、察さつしられますが、ほかにも子こ供どもどうしで、あの木きの芽めはたべられそうだとか、あの草くさを煮にてたべたら、おいしかろうとか、真しん剣けんにいい合あっているのを聞きくと、いじらしい気きがして。」

これをきいて、地じ主ぬしは、なんとも返へん答とうがでしなかつた。そして、おしよさんの今き日ようきたわけが、いよいよはつきりのみこめ

たけれど、ただ寄付はしたくなかったのです。そして、半分は、いつわりなく、心のうちをいって、弁解するように、

「せがれが、もし生きていますなら、どこか山の中で、へびや、とかげを食っていることでしょう。そう考えると、だれも彼も、いつしよに苦しむがいい、と思ひまして、たとえ子供であろうが、特別に同情する気になれません。」といいました。

「いや、正直なお話です。あなたばかりでなく、みんなが、悪い夢を見えていますのう。」と、おしようさんは答えました。

「悪い夢とおつしやいますか。」

「さよう、悪い夢にちがいない。すべて夢からさめるのを悟りといひますのう。別に、美しい、なごやかな、真の人間世界があ

るはずだが。」と、おしろうさんは、いいました。

「どうしたら、その世界せかいを知しることができですか？」と、地主じぬしは、いいました。

「それを、いま私わたしがいつてもわかりません。正しい心ただこころをもちながら、忘わすれたのであれば、かならず悟さとる日ひがありますじゃ。」

「ついで、長居ながいして。」と、おしろうさんは、あいさつして、縁えんが側わへ出でてから、庭にわのさるすべりを、ほめて帰かえりました。

ある日ひ、地主じぬしは、用ようたしでお寺てらのそばを通とおると、ちやうど孤児こじたちが、庭にわで遊あそんでいました。境内けいだいには、はぎの花はなが盛さかりなばかりか、どこからともなく、もくせいあまずの甘酸あまっぱいさかような香かりがただよってきました。

ひとり
一人の子が、ふいに、

——南みなみから、南みなみから、とんできた、きた、渡り鳥わたどり、うれしさに、

楽したのしさに、——と、うたい始めはじめたのです。すると、ほかの子こも、
手てをたたいて、調子ちようしをとりました。歌うたうと、どの子この顔かおを見みて
も、無心むしんで、さも楽したのそうでした。

おそらく、このときの子供こどもの心こころは明あかるく、なんの悲かなしみもな
ったでしょう。地主じぬしは、それに誘さそわれて、自分じぶんが子供こどもの時分じぶんを回か
いい想そうしました。自分じぶんにも、こんな時代じだいがあつた。いたずらをして、
しかられても、すぐ悲かなしみを忘わすれて、なにを見みても楽したのしく、美うつく
く、だれ彼かれの差別さべつなくなつたのであつた。

「おしよさんが、いわれたように、子供こどもに罪つみはない。すべてが

おとなの責任なんだ。子供は、いつも美しいし、子供の心は、いつも朗らかだ。それを、なんと大人が、一たび道を誤ったばかりに……。」

こう感ずると、地主は、急に悪夢からさめたような気がしたのでした。同時に、目の前へ、清らかで、平らかな人として踏むべき道の開けるのを感じました。地主は、いきいきとして、歩きながら、自分のからだに、良心の火がまだ残っていたのが、限りなくうれしかったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「社会 創刊号」

1946（昭和21）年9月

※表題は底本では、「子供《こども》は悲《かな》しみを知《し》らず」となっています。

※初出時の表題は「悲しみを知らない噺」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供は悲しみを知らず

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>